

## 名誉会員の推挙に寄せて



岡本民夫 新名誉会員  
(同志社大学名誉教授)

(本学会役員歴)  
11期・12期・15期  
16期・18期・19期  
以上 理事6期



このたび日本社会福祉学会から名誉会員の称号を拝受し、光栄に存じます。顧みれば、入会以来、半世紀に及ぶ長い間多くのことを学ぶ場と機会を与えて頂いたことに深謝申し上げますとともに、今後はライフワークである「ソーシャルワーク理論史の研究」に邁進したいと考えています。

ところで、この半世紀の間、気にしてきた課題の一つは、社会福祉学の科学の仕方についてであります。学問の自由は前提条件であるが、社会福祉学には、隣接諸領域の学問とは相互に排他的で独自固有の学問の仕方や研究方法論が十分成熟していないように思われる。以下の提言は夢であり、妄想に過ぎないかもしれない。しかも今後何年かかるかもしれないが、独創性に富んだ研究方法論の創生と構築に努力してもらいたいと期待しています。そこで以下のような提言を行い、多くの会員からの忌憚のないご批判とご助言を頂戴したいと考えています。

1つには、伝統的な諸科学の知見や法則を応用して進める演繹的な方法で、「科学研究方法」というべきもので、ほぼ定着し、かつ今後とも踏襲される最もオーソドックスな方法である。

2つには、帰納法的なやり方で、現場・臨床からの具体的事象を系統的に集積し、その蓄積の中から知見や経験法則などを析出し、理論化する方法であって、過去30数年前から「実践の科学化、理論化」として主張してきたものである。

3つには、「利用者ニーズの論理化」であり、利用者本位の理念の具象化でもあり、当事者による情報発信を基盤とする援助・支援の理論を構築していく方法である。

4つには、これらの次元の異なる成果を弁証法的に展開し、新たな研究方法を産出しようとするものである。

最後に、これらの諸成果を融合化するために必要な「触媒」としての発想、アイディア、開発、発見、発明を行うための「社会福祉のシンクタンク」を構築し、その中から新しい研究方法論を産出する作業を急がなければならない。

以上のようなことを近未来に向けて検討して頂くことを期待しています。